

無冠の旗

夏堀正元



無冠の旗

夏堀正元



河出書房新社

無冠の旗

定価八五〇円

昭和四十八年四月十日 初版印刷
昭和四十八年四月十五日 初版発行

著 者 夏堀正元

装幀者 上野泰郎

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京(〇三)二九二一三七一一
振替 東京 一〇八〇二

目次

青春の渦	五
上昇気流	三
転生の時	五
恋と暗殺	六
崩壊前夜	一〇
乱心の国	三
二位の人	一四
息子の帰国	一五
殺され損の国	一六
汚れた旗	二九

戦火のなかで	三
盲目の帝国	二五
燃えつきた街から	二七
老骨に賭ける	三〇
辛酸また佳境に入る	三三
赤い旋風	三六
骨肉の争い	三九
壮介の死	四二
破局への道	四四

無冠の旗

「小説サンデー毎日」に連載された
「無冠の王者」を改題したものです。

青春の渦

1

それはちょっと風変りな初夜であった。寝巻を着た花婿と花嫁が、親類縁者が贈ってくれた燃えるような緋縮緬の蒲団をはさんで、いつまでもむかい合っているのである。

二人が顔をあわせたのは、これが二度目であった。最初はおなじ足利に住む花婿側の親戚が、二人とそれぞれの両親を渡良瀬川の畔にある小料理屋に、見合いのために招いたときで、わずか二十日ほど前のことだった。

それがもう、いまでは夫婦としての初夜を迎えようとしているのである。

花婿は太田原壮介という二十三歳の青年で、色の浅黒い、立派な顔立ちをしており、やや太い鼻柱と頑丈そうな動物的な顎とが、負けず嫌いの性格を示していた。花嫁のたみ子の方は十九歳。色白で整った顔ながらも、いくぶんエラの張ったところや、つり気味の大きな目に、花婿以上の気性の激しさがかがわれた。

太田原壮介が固くなっているのは、どこやら血の匂いのす

る初夜の儀式に、抵抗を感じているためでもなければ、興奮のあまり、緊張しているためでもない。むしろ、女の軀をどう抱いてよいのかわからず、途方に暮れているせいでもない。

壮介はすでに女を知っている。十代で横浜で働いていたころには、本牧の淫売婦に手ほどきを受けたし、つい最近までいた近衛歩兵一連隊の一等兵のときには、たまの休日になると郷里の足利に帰るよりは、十二階下あたりへまず駆けこんでいったものだ。いまだに女が怖いわけでは、毛頭ない。

だが、壮介は顔を羞しそうに伏せるでもなく、むしろ挑むように自分をじっと見つめている無言の女に、妙に気押されるものを感じていたのだ。彼は寝巻姿のたみ子の、いかにも弾力のありそうな腰から太腿にかけての若々しい軀つきに、チラリと視線を走らせながら、

「さてと……これで、おれたちも、どうやら夫婦になるらしいな」

と照れ隠しのようにいいだした。が、そういつてみて、ひょっとおかしな気持になった。なにしろ、互いに相手がどんな人間か、ちっともわからぬまま固い契りを結ぼうというのだから、こいつはまるで危険な博打のようなものだな、と思ったのである。

たみ子はほとんど無表情のまま、黙ってうなずいた。

「そこで、おれの目標だが……」

と壮介は相手の沈黙にいらだって、気負いこんでいったも

の、ちよつとどもりがちになった。

「おれは、きつと大成してみせる」

「大成するって、それ、お金持になるということですか」

きちんと正坐したままの姿で、たみ子はやつと口をきいた。

「むろん、そうだ。おれは立派な商人になるつもりだ。そのためにはまず、五年間は禁酒禁煙をつづけて、もりもり働いてみせる。睡眠時間は五時間でいい」

壮介は厳肅な顔つきで、初夜の誓いをたてた。

「わかりました。わたしもおよばずながら努力いたします。でも……最初にどのくらいお金を儲けるか、きめた方がいいと思います」

たみ子が冷静な口調でいって、壮介を内心うろたえさせた。

「そういっても、あんた……」

壮介は思わずそう呼んだ。

「反物をひとつひとつ売り歩くのだから、そうは儲けられない。ただ、懸命にやるだけさ」

彼は結婚を機会に、足利で織物業を営んでいる生家から独立して、呉服屋をはじめようとしていたのである。もつとも、呉服屋といったところで、大きな紺の風呂敷に中級品どまりの足利銘仙を背負い、近在の農村をはじめ京浜方面に売り歩く「ジョイ呉服屋」という零細な商売なのだ。

「だけど、店を構えるよりは儲けはいいはずですわ。だか

ら、せめて、一万円ぐらい貯めこむのを最初の目標にしたらどうでしょうか」

彼女自身、小さな織物業者の娘であるたみ子は、いとも平然といつてのけると、にっこりと笑った。なにしろ明治三十六年末のことである。そのころの一万円といえば、いまの数千万円にも値しよう。

「一万円？……ウム……」

壮介は氣を吞まれたようにうなづいて、いったい、こいつはどういう女なのだ、とあらためてたみ子の顔を見た。実際、初夜の寢床を目のまえにして、二十三歳の若い夫にそれだけの大金をつかめとけしかける若妻が、どこにいるだろうか。

壮介の顔は赤黒くふくらんだ。それから突然躍りかかるようにしてたみ子を抱き寄せ、寢床のなかに乱暴にひきずりこんだ。彼はたみ子の挑戦的ともみえる態度に、猛然と征服欲を刺戟されたのである。

「なるほど……おまえはおれにふさわしい女かしらん」

そうつぶやくと、壮介はやにわにたみ子の寝巻の前をはねあげて、むきだしになった白い腿の奥をまさぐった。

「とにかく、おれは大金持になってみせるぞ」

うわづった声でいった。

「ええ……二万円貯めこむまで、わたしも頑張りますわ」

たみ子は軀をひらきながら、にこやかに答えた。あつというまに、彼女の目標は二万円にはねあがっていたのである。瞬間、壮介は張りきっていたおのれのシンボルが萎えていく

思いがしたが、男の沽券^{こけん}にかかわると考えて、鸚鵡^{やうり}返しに、「よし、二万円だ、二万円だ……」

とわめきながら、たみ子の大きな臂を抱えなおすと、その柔らかな体内に、あわてふためいたように没入していった。

こうして、太田原夫妻は足利の裏町に借りた小さな家で、新世帯を持ったのである。

足利というところは、古い伝統の町である。室町將軍尊氏をはじめとする足利氏の発祥の地であり、その館跡が鏝阿寺^{げあし}にあって、有名な「足利学校」の史蹟ともなっている。

足利学校というのは、平安時代初期に小野篁が創設したともいわれているが、定説ではない。もともと、足利氏の寺であった鏝阿寺が教学活動をはじめ、それが鎌倉末期に独立し、のち一時衰微したのを室町の初期に上杉憲実が復興したもの、と推測される。

この学校で教えたものは、主として易学、軍学、医学などで、軍事を中心とした戦国争乱期の総合大学の観があつて、ここを訪れたポルトガルの宣教師たちは、「日本最大で、もっとも有名な大学である」といっているほど、多くの子弟を集めていたらしい。

いまでは、孔子を祀った聖堂を残すのみで、隆盛をきわめたむかしの面影はしのぶべくもないが、「学問の府」としての静かな重々しさは、町のたたずまいにしみこんでいるようである。

足利はまた、絹織物の名産地として中世から知られ、渡良

瀬川の河港は反物を積みだす船で栄えていたといわれている。明治二十二年に両毛線が開通したいまでは、関東一円の絹織物業の中心地となっていた。

ひと口にいうと、足利は古い文化と実業とが微妙に結びついている町で、それだけに万事保守的である。型破りな生き方は、そこにいるかぎり、できそうにない。

だから、壮介も型破りな生き方を試みたわけではなかった。彼にできることは、「五年間の禁酒禁煙、五時間の睡眠」といった初夜の誓いにみられるように、儉約と勤勉という昔ながらの商人道に徹することではなかった。

幸い、たみ子とはびったり呼吸が合いそうであった。たみ子は最初から男まさりの壮介の母親の眼鏡にかなっただけに、勝ち気なしっかり者だが、なかなか利巧で、口数は少なく、商売に口をだして夫の自尊心を傷つけることは決してしない。

ただ、壮介がちょっとでも怠けて、寝坊でもしようものなら、容赦なかった。黙って予定どおり起床すると、朝食をつくり、大きな紺の風呂敷に反物を入れなおし、手甲、脚絆、笠まで用意してから、おもむろに夫を揺り動かすのである。

「一度怠けたら、きりがなくなるもんね」

そういって、彼女はさわやかに笑うのだった。

その顔をみていると、コン畜生、と壮介は思う。だが、逆らえない。逆らえば自分の誓いを破ることになり、自分の負けとなる。だから、彼は眠い目をこすりながら、あたかも妻

への敵愾心にあおられたような気持で、蒲団を這いだすのである。

「いったい、こいつはほんとうに五時間の睡眠で満足しているのだろうか、そのうちに悲鳴をあげるにきまつてゐるさ。」

けれども、期待にも似たその気持は、完全に裏切られた。

たみ子は一度も不平をもらさず、真冬を迎えて毎朝、氷の張ったカメの水を汲んで、食事をつくり、毎朝気持よく夫を送りだしていた。

夫の留守中も、彼女は昼寝などしない。それどころか、たみ子も反物を背負って、近くを売り歩いていたのである。

「やはり、女房ってものは、勝気な方がいいのさね」

とある日、ひょっこりと顔を出した壮介の母親のまつ代は、満足げにいった。まつ代は勝気で口うるさいために、夫に敬遠されてきただけに、ことさらそういつてみたかったのであった。

「そうだな、よく働く女房で、我慢強いし、おれは運がよかったのかもしれないな」

壮介はボソボソした声で、まんざらでもなさそうに答えたものである。

2

幸運はそればかりではなかった。結婚後二カ月たらずで、日露戦争がはじまったのである。相手は世界最強の陸軍を誇示するロシアだから、激戦は必死であった。勝利を信ずる者

はひと握りの好戦的な権力者をのぞいて、誰もいなかった。枢密院議長の伊藤博文ですら、まったく自信がなかった。

「こんどの戦争は、陸海軍ともに成功の見込みはない。戦いに勝利を得んとするのは無理である。成功しようと思えるのでは駄目だ。尽くせるだけ尽くしてみるしかない」

と、側近の金子堅太郎貴族院議員に語っていたのである。

もしも、壮介が近歩（近衛歩兵）一連隊にいたら、まちがいに戦場にかりだされることになったろう。だが、わずか三カ月早く除隊したおかげで、ともかくも、すぐに死を覚悟することはなかった。

「おれは、運がついてるぜ。このツキを利用しなくちゃな……」

彼はホッと胸をなでおろした。

もちろん、戦況次第では召集される可能性は充分にあった。だが、世帯持ちは多少目こぼしされるという世間の噂が事実なら、応召もまだ先のことだ、とたかをくくっていた。

「第一、おれは損な戦いはしたくない。おれはどこまでもソロバンに生きる商人だ。戦争は薩長の「官軍さん」にまかしたけがいいのさ」

彼はたみ子にいつて、それまで以上に商いに熱中していた。

もともと、壮介は軍隊嫌いであった。皇居内にある近歩一連隊にいた二年半の兵営生活のなかで、彼が身につけたものは「軍人精神」でも「大和魂」でもなかった。ただ旺盛なば

かりで雲のようにとちえどころのない出世欲だったのである。

といつても、軍隊で偉くなろうとしたわけでは、むしろない。それどころか、隊内で偉くなる最低のチャンスにも、失敗してしまった。一等兵の後半期に受けた上等兵進級試験に、ものの見事に落第したのである。なまじ学科にはある程度の自信があっただけに、そのつまらぬ失敗の衝撃は意外に大きく、惨めな気持を味わった。

しかし、負けず嫌いの壮介は、戦友のひとりで上等兵試験に合格した山代圭三に、したり顔で慰められると、ムキになつて反撥した。

「どうせおれたちのような平民の子は、いくら頑張つたところで、伍長か軍曹さ。それ以上は絶対出世できんのだから、試験に落ちたつてどうつてことはない。かえつてサバサバしたくらしいのもんさ」

軍隊という閉鎖社会は、怖るべき身分社会であつた。たとえ階級がおなじでも、一日早く入隊した者は「上官」として威張り散らすことができたから、星が一つ違えば、それはもう完全な主従関係で、どんな無理難題をも甘受しなければならなかつた。

壮介が入隊してから早々に、こんなことがあつた。

それは壮介ら新兵が、班内の掃除をした直後のことである。

「初年兵集合！」

という突然の古兵の号令に、壮介たちは班内に一列に並ばされた。すると、七、八名の二つ星の古兵が、列のなかを縫うようにして歩きながら、大声で罵りはじめた。

「おい、新兵さんよ、貴様ら、たるんどりやせんか……だいたい、これが掃除つてものかよ！ 軍隊の掃除つてのは、床を舐めても埃がないようにきれいにすることなのだ。だが、貴様らのこのざまは、いってエどういうことだ！」

古兵たちは指先でさつと床の上をはき、指が汚れると、それを新兵の目のまえに突きだして怒鳴つた。

「てめエらは、清潔であるべき内務班にたいして、申訳のないことをしたのだ。そのお詫びとして、いまから、そのバケツの水を飲め！」

バケツの水というのは、たつたいま新兵たちが床を拭いた雑巾を何度もすすいだ水で、銃の油や土埃で真っ黒になった汚水である。班内にある粗悪な毛布の繊維や小さな藁屑なども無数に浮いている。

古兵たちはその汚水を初年兵たちに順ぐりに飲ませたのであつた。しかも、新兵たちは不動の姿勢で、

「△△二等兵、バケツの水を飲まさせていただきます！」

と大声で叫ぶと、床の上に四つん這いになって、悪臭に鼻をひんまげながらバケツのなかに顔を突っこみ、黒い汚水をゴクリと飲みこむと、また不動の姿勢にもどり、

「お蔭さまで、たいへんおいしくありました」
と頭を下げなければならなかつた。なかにはゲェツと吐き

だす者もあり、壮介もそのひとりだったが、結局はもう一度汚水を飲まれた上、往復ビンタをくわされて、床の上に転がった。

情ないことは、こんな理不尽ことをする者もされる者も、ともにおなじ階層の出身者で、商人とか百姓であることだった。どんなに長く軍隊にいて忠勤を励んだところで、たいていは上等兵どまりで、下士官に昇進するのは幸運に恵まれたごく一部の者たちであった。

いつてみれば、おなじ仲間が殴り合い、傷つけ合って、軍隊組織を支えているようなものである。——壮介はすっかり莫迦莫迦しくなった。

御一新で「四民平等」になったというのは表面だけのことで、軍隊では相変わらず歴然とした差別があった。出世できるのは士族であり、とりわけ藩閥政治が大手を振ってまかり通っているいまでは、薩長土肥の士族どもが、どんどん出世して権力をほしいままにしていた。

「……どうせ、おれたちゃ官員さんにもなれないし、軍隊でも一生下積みの人間だ。上等兵になったからって、そんな嬉しい顔をするのはどんなものかね」

壮介は多少の口惜しさもこめて、山代新上等兵にかみついた。

「長いものに巻かれてことさ。ここで要領よく生きるためには、上等兵になる必要だってあるってことよ」

山代はニヤニヤ笑って受け流した。

「畜生、おれは必ず金持になってみせる……奴ら威張りくさった連中を、そのうち顎でこき使ってやる！——試験に落ちちて、かえっておれは目が覚めたぜ」

壮介はうめくようにいった。

たしかに山代のいうとおり、軍隊では万事が要領であった。上級者にへつらい、仲間を中傷し、うわだけの勤勉ぶりをしめす——それがその要領というものであり、嘘もかっぱらいも、「要領」ということばのなかで都合よく正当化されていた。

たとえば、軍帽とか銃の棚杖（きくじょう）（銃口を掃除する細い鉄棒）をなくしても、他人のものを盗んで「員数を合わせて」しまえば、それが要領がいいということになるのだった。だから、

「軍隊にいれば、嘘とかがっぱらいがうまくなる」といわれもするのである。

だが、本来生真面目な性格で、みずから恃むところのある太田原壮介には、そうした誤魔化しの生き方はできなかった。だいたい、そんな要領はどれもこれもおなじ型で、順ぐりに上級者の権力に媚びへつらいながら、その権力を自分のつまらぬ欲望のために利用していく卑劣なやり方であった。人間らしい獨創性など、どこを探しても見当らなかつた。（もつとも、軍隊では獨創性とか個性的な人間をなによりも嫌うから、みな人真似しかなくなるのも、無理のないことだったのである。）

壮介は猿真似をして生きるのは嫌だった。
「おれは正々堂々と、自分ひとりの独特なやり方で、運命を切りひらいてやるんだ」

天皇直属の親衛隊である近歩一連隊のきびしい訓練に耐えながら、彼は純真な青年の一途さで考えこんだ。

壮介が休日の外出ごとに、十二階下の女を買いにいくのをつつりとやめ、神田の古本屋で書籍を買いこむようになったのは、上等兵試験に落第したその直後からである。徳富蘇峰の『国民之友』や志賀重昂・杉浦重剛・三宅雪嶺らのはじめた『日本人』などの雑誌、二葉亭四迷の『浮雲』、島田三郎の『開国始末』、スペンサーの『社会平権論』、福沢諭吉の『学問のすすめ』『通俗経済録』『通俗民権論』……などと、彼が買い求める本はなかなか変化があった。

壮介はそれらの書物を営内に持ちこむと、班内にある自分の整理箱の蓋の裏に「読了予定表」をはりつけ、その横に、「男子志ヲ立テテ郷関ヲ出ヅ、学モシ成ラズンバ死ストモ還ラズ」と書き記した。

それから上等兵候補者にのみ許された消灯後の読書時間を利用して、事務室にいき、「軍人勸諭」や「歩兵操典」を勉強するふりをして、それらの書物を片っ端から乱読していた。軍隊の「要領」を逆手に取ったのである。

この勉強のため、彼は日中を激しい訓練でしぼられながらも、五時間の睡眠ですっと押し通した。

それはまるで「学問の府」足利の伝統が、壮介の内部で不意に目覚めたかのような勉強ぶりであった。後に結婚して、五時間睡眠を実行したのも、この軍隊時代の経験で自信があったからである。

壮介がもっとも感激した本は、福沢諭吉の『文明論之概略』であった。

「——個人の自主独立こそ、国の独立と文明の基礎である」という福沢の考え方に、壮介はいきなり頭を殴られたような気がした。

「そうなのだ、大切なのは、この自分なのだ、自分が豊かな人間として独立することが、先決なのだ」

彼はくりかえし自分にいいきかせた。それだけに、国家をやたらに押しだしてきて、個人の自主独立を否定する軍隊にたいしては、ますます鋭い批判をもつようになっていったとしても、当然であった。

だが、壮介の秘密の読書は、戦友の山代上等兵に嗅ぎつけられてしまった。

「貴様、こんなものを読んで見つかったら、えらいことになるぞ。生意気な奴だと、半死半生のめに遭わされるのがおちだろうぜ。第一、そんなもの読んだところで、金儲けにはなるまい」

山代は心配顔で注意した。

「いいさ、覚悟のうえだよ。それに、世のなかを広く知ることが、これからの金儲けには大切だとおれは思うんだ……上

等兵殿にはなれなかったけど、ロスチャイルドか安田善次郎のようになれるかもしれないから」

壮介は戦友をからかうようにいって、明るく笑った。

こうして、壮介の軍隊生活の後半は、ひそかな読書に明け暮れていたたのである。横浜時代に聞きかじったうろ覚えの英語の独学をはじめたのも、この兵營のなかであった。

壮介にとって、いちばん待遠しいのは、夜九時の消灯ラッパであった。ラッパの澄んだ音が營内に響いたその瞬間から、彼のひとりの時間が、ふくらみきった希望の翼を羽搏せはじめるのだ。

「タイム・イズ・マネーだな、まったく……」

壮介はあくびをかみ殺しながらつぶやいて、疲れた目に力を入れて、書物のなかへ首を突っこんでいくのである。

3

太田原壮介の学問好きは、実はいまにはじまったことではなかった。すでに横浜の元町にある生糸輸出問屋で働いていたところから、学問好きの丁稚だったのである。

壮介は四人きょうだいの末っ子で、足利の小学校をでると、二年ばかり家業を手伝った末、十四歳のときに「兼東」というその生糸問屋に、見習い小僧としてだされた。小学校のときから勉強好きではあったが、臆病でおとなしい壮介は、このときは意外なくらい最後まで渋り、「商業学校へいかせてくれ」と父の泰吉に泣いて頼んだが、無駄であった。

「商人は学問よりも、軀で商売をおぼえた方がよい」と、泰吉はおなじことばを幾度もくりかえしただけだった。

やむなく、壮介は横浜へいったが、しばらくすると、夜学の商業学校へいかせて欲しいと主人に頼みこんだ。明治二十八年のことである。

「そうだな……うちの仕事はきついからな、折角学校へいっても、居眠りばかりしとのじやないかね……しかし、それでも、どうしてもというんなら、まあ通ってみてもいいかね」

主人はどうせ永続きはしないさ、という笑顔をみせて、許してくれた。

たしかに、主人のいうとおり、店の仕事は目のまわるように忙しかった。ほかに二十人ほどの丁稚と六人の番頭がいたが、新米の壮介はなにかにつけてこき使われて、一日中飛びまわっていなければならなかった。

それに、仕事の大半は力仕事である。日本の輸出生糸の八割以上を買付けるアメリカへ送りだすために、生糸を梱包するのだが、これがなかなかきつい労働なのだ。まず、一総十八・六匁（七〇グラム）の生糸をひねり造りとして三十総づくる。これを一括として綿糸でくくって紙に包む。輸出の場合、約二十九括を一俵（十六貫〓六〇キログラム）として紙で包み、かなきん袋に入れてマニラロープでくくり、さらに防水紙に包んでアンペラで包装する。これを十俵あつめて

一荷口とし、輸出にあてる。

店が戦場のようになるのは、貨物船の出航に急に品物を間に合わせなければならぬときだ。そんなときは息つく暇もない。新米の壮介は怒鳴られっ放しで、店のなかを小走りで動きまわる。おまけにその合間には雑用がいろいろつけられる。

「ホラ、壮介、倉庫へ行ってこい」

「ここを掃除しとけ」

「壮介、煙草を買ってこい、ヒーローだぞ！」

「生糸取引所の××さんにきてもらってくれ」

十四歳の壮介は、もう泣きたいような気持になる。

肝腎な仕事はまだある。生糸の品質の見分け方を番頭や、先輩の丁稚から教わらなければならない。だいたい、生糸の品質を肉眼で見分けるようになるには、数年もの年季がいるといわれている。いくら、家業のせいで幼ないときから生糸を見慣れているといっても、十二等級にも分けられている輸出生糸の格を識別するには、たいへんな努力がいる。

だが、番頭や先輩の丁稚たちにもったいぶって、なかなかそのコツを教えてくれない。

「自分で勝手に覚えるこつたな。おれだってそうしてきたんだ」

と突き放す者もいれば、

「夜学で教えてもらってきたらいいじゃないかよ」

と嫌味をいう者もいた。

そのうちに、矢崎義人という三番番頭が夜学から帰ってきた壮介をつかまえて、

「おめえはなかなかいい根性をしているぜ。どんなにつらくても、学校をやめないとこが、おれは氣にいったな」

といって、生糸の見分け方を教えてくれた。

「口で説明してしまふと、簡単なことだがよ、実際にわかるようになるには、やはり年季がものをいうのさ。だから、そんなことであせることアねえぜ」

矢崎は柔和な笑いを薄い唇にうかべながら説明した。それによると――、

「糸の色相が全体にわたって整っており、光沢が強くて、底光りのするのがよい」

「糸の抱合が緊密で、丸味を帯びたものがよく、扁平でふくれたものは不良」

「糸の太さが一様で、糸むらや節のないのがよく、糸をひっぱって強い弾力のあるのがよい」

「手ざわりが強靱で柔軟であり、軽く握って掌のなかでふわふわした反撥力のあるのがよく、腰が強くて柔らかなのが上等」

壮介は矢崎に礼をいった。

「……でも……たしかに口じゃ簡単にいえても、ひとつひとつ品物を手にとってみて、ほかのものと比較してわかるようになるには、たいへんですね」

壮介はいくぶんがっかりしたのである。

「そうだよ、坊や、生糸つてのはひどく敏感な生きものだからな、ひょっとすると、一生つきあってもよくわからねえ女のようなものかもしれないぜ」

矢崎はまた薄い唇で、小さく笑った。なんだか寂しそうな人だな、と壮介はそのとき感じた。

それにしても、壮介は矢崎が感心したように、よく閉口たれもせず、夜学に通いつづけた。一日も休みはしなかったのである。

ただ困るのは、毎晩十時半になると、儉約屋しまりやの主人が、家のなかの灯を全部消してしまうことだった。そのため、学校から帰ってくると、復習も予習もできないのであった。

しかし、そのうちに、壮介はうまいことを思いついたので、すぐに実行に移した。店にある大きな神棚のローソクに火をつけて、その灯で勉強をはじめたのである。

とはいえ、神棚はかなり高いところにあるので、灯明の光は小さな字を読むにはちょっと不便だった。そこで、彼は神棚の下に机をはこんでいき、その上に空箱を積み重ねてのぼり、灯明の光で充分に字が読めるように工夫した。

「神様に護られて勉強するのだから、こんなありがたいことはないな」

彼はニヤニヤ笑って得意になっていた。こうして壮介は毎夜一時ごろまで勉強し、朝は六時にちゃんと起きて、店内の掃除から一日の労働をはじめた。

ところが、その年の冬、ひときわ厳しい寒波が襲ってきた

夜、机の上の空箱の上に薄い座蒲団を敷いて坐り、毛布を頭からすっぽりかぶって数学の宿題を解いていた壮介は、寒さのために足が痺れてしまったのか、便所にいこうと降りかけたとき、平衡を失って、ガラガラガラと転がり落ちた。

この物音に驚いて丁稚が騒ぎ、奥から家人が駆けつけてきたため、壮介の勉強ぶりが主人に知れた。

「そうか……頑張っておるか。しかし、おまえひとりのために灯をつけるわけにいかん……が、まあ、よい、これから店にランプをつけてやるがよい」

主人はすりむいた膝小僧に唾をつけて撫でている壮介を見おろしながら、苦笑していった。壮介が主人の信用を得たのは、このときからであった。

けれども、やがて主人に重用されだすと、壮介の夜学通いにも支障が起った。主人からじかに、「今夜はすまんが学校を休んで、日本橋の田丸さんのところまでいってくれ。大事な用事だから、とくにおまえに頼むのだ」などといわれると、なんとも断りきれなくなったのだ。

壮介は学校と主人のあいだにはさまって、悩むことが多くなっていた。その結果は明らかだった。使用人としては、学校を犠牲にするしかなかったのである。

このため、壮介は主人から可愛がられ、重用されればされるほど、自分から学校を遠去けた主人をひそかに憎むという、矛盾した状態におちこんでいった。